



香

Bブロック全作品と講評

www.columnland.net

甘味

塩味

苦味

酸味

うま味

おなかがすきました。

コトノハ

とりあえず、舌を口のどこに置いたらしくくりくるか考えてみてほしい。

ほらいつもは気にも留めてないのに、意識すると口のどこにおいても気になるはずだ。さて、冗談はこれぐらいにして本題に行こう。

言葉という言葉がある。つまり、一度口に出した言葉には魂が宿り、力をもってしまう。といったことだ。別に言葉といった大げさな話でなくとも、大なり小なりこの経験はあるはずだ。何の気なしに話したことが相手を傷つけたり、とくに大きな意味もないジョークで場が凍りついたり、だ。

「言葉の魔力」は例を挙げればキリがない。が、どうもその魔力は意味のある言葉だけでなく、口調といった、舌から生み出される音にも宿るらしい。

明るく、皆から好かれてる人の話が、実は辛辣極まり無い代物だったり、ワガママを押し通してるにも関わらず、皆から好かれていたりする不思議な人が、中学高校に一人ぐらいはいたのではないだろうか。逆に、言ってる内容は正論にもかかわらず、皆から間違ったことを言っている様に思われてる人もいたはずだ。話の内容すら包み隠してしまうこれも、一つの「言葉の魔力」と言えるはずだ。

このことは、古代の先人達も良く理解していたらしい。世界各国、様々な形で魔術、宗教が残っている。それらの儀式の中で、完全な静寂の中で行われるというものは非常に稀だ。必ず、何らかの呪文、或いは楽器などによる「音」がその中に絡んでくる。

例えば、古代中国で、不死の薬、「丹」を錬成しようとするときは、祭文を“声を出して”

読み上げ、神の加護を祈ったし、日本の神道では、厳かな声で、神様への祝詞が唱えられる。そして、西洋のキリスト教では、讃美歌と「アーメン(AMEN)」が絶えたことがない。それだけではない、もっと俗な話をするならば、アニメで魔法少女が全くの無言であったこともない。必ずそこには何らかの「呪文」が入ってくる。これも音、ひいては言葉に力が宿る、という考え方が変遷を経て残った結果だろう。

Twitter、Skype、Mixi、メール、電子掲示板と、肉声のやり取りがさほど重要とされなくなってきた今こそ、再度これらの「言葉の魔力」。口調一つで人の印象すら変えてしまう力を改めて考え直す必要があるだろう。

動物たちのお話

猫「なあ、猫さんよお」

犬「なんだい？」

猫「牛の奴に『最近、犬の奴が調子に乗ってるよな。一緒に痛い目に合わせようぜ。』って言われたんだよ。」

犬「何だって！それは本当かい？」

猫「その反応からすると、何か知ってるって考えていいのかな？」

犬「知ってるも何も、俺もさっき『猫を痛い目に合わそう』と言われたばかりだよ」

猫「あいつ、最近オーナーに可愛いがられてないもんな」

犬「そうか、俺たちはただのペットだけど、あいつは家畜だもんな」

猫「それに、乳牛の方は毎日のようにオーナーと触れ合ってるしな」

あいつは、餌の時だけじゃないのか？」

犬「どうにかしてオーナーをあいつに注目させないといけないな」

人「二枚舌の牛か。養殖すればタンが多く取れて収入が上がるかな？」

ランチタイム とある4時間目の早弁

先生「今日は人間の五感についての授業をします。まず、味覚について扱いたいと思います。味覚とは、食べ物を食べた時に甘さ・辛さ・酸っぱさ・苦さといったものを感じ取る感覚器官です。舌の構造としては舌の先で甘さを、側面前方で辛さを、側面後方で酸っぱさを、舌の奥のほうで苦さを感じ取ります。……」

佐藤君「こんな話聞いたって何の役に立たないし、

早弁、早弁っと。」

小林君「俺も。4時間目だし、早弁しないわけがないよなー。」

先生「こらっ、佐藤君！今は授業中だぞ。弁当を食べるなんてけしからん！さっさとしまいなさい。」

佐藤君「むぐう。(ちょうど嫌いなピーマンを食べてたところだったのに。口直したいなあ。それにしても俺だけ怒られるのは不愉快だな。みんなも早弁してるって言うのに！)」

松橋君「くくっ、先生の話聞いてなかったのか？苦味は舌の奥のほうで感取るものだから、ピーマンなんか食べて怒られれば後味悪いよな。(笑)」

「ひとひらの恋」

『ロリータ』という小説がある。かの有名な「ロリータコンプレックス」という言葉の語源にもなった、中年の男が十代前半の少女に倒錯した恋心を抱くという、人によっては聞いただけで眉をひそめるであろう内容の話である。

私もまた、主人公の心に理解を示せなかったひとりであった。古典文学を読むのが趣味であった私だが、この小説ばかりはさすがに純粋に面白がることができずにいた。

そんな私を変えたのは夏祭りの夜である。

友人と連れ立ってピカピカと明るい夜店の並ぶ砂利道を練り歩いていたあの夜、私は紺色の浴衣の少女を見かけた。彼女は真つ赤な林檎飴を片手に、ずらりと並んだお面の前に立ち尽くしていた。友人が少しばかり遠い夜店へ綿菓子を買に行っている間、私は預けられた金魚と水あめを抱えてぼんやりと少女を眺めた。赤や黄色、様々な色の光に照らされたアンパンマンやウルトラマンの顔を彼女は興味津々といった面持ちで見つめていた。その姿はなんとも微笑ましく、まだ幼さの残る横顔がひどく愛らしかった。

彼女は振り向いた。そして私の視線に気づき、ひどく無邪気な笑顔をこちらに見せた。彼女の舌は小さくて真つ赤に艶めいていた。

今まで見たどんな赤色よりも、それは美しかった。

友人が綿菓子を手に入れて上機嫌に戻ってきたとき、私は何処かへ走り去ってしまった少女の姿を幾度となく反芻していた。

私は決してロリータコンプレックスではない。しかし、ロリータに恋をしたハンバートのごとく、私は彼女の舌に恋をしたのである。倒錯的愛情は、おそらく世の中の何処にでも転がっている。

「日記」

今日は

電車のホームで並んでいたら自分の目の前をおばさんが割り込んできました

ちょっと舌打ちしたくなりました

電車の窓に映る自分を見たら

今朝十五分かけて直した寝癖が元に戻っていました

ちょっと舌打ちしたくなりました

電車を降りてホームの階段を上っていたら

ちょっとこけました

かわいい女の子がこっち見てました

ちょっと舌打ちしたくなりました

学校に着いてカバンの中をみてみると

下敷きを持ってきていないことに気付きました

ちょっと舌打ちしたくなりました

カバンの中がくさいと思ったらお弁当から汁が漏れていました

ちょっと舌打ちしたくなりました

カバに似ている友達に

「お前ってはんぺんに似てるよな」と言われました

ちょっと舌打ちしたくなりました

帰る際

あの子に初めて笑顔で手を振ってもらいました

今日はいい日でした。

夏が来るとふと思ひ出す。
冷たくて、美味しくて、それからほ
んの少し切ない——かきごおりの味。

「アオンベ」

当時から、近くの山の中腹にある神社では、夏祭りのたびに大勢の参拝客でにぎわっていた。

蒸し暑い夏の夜、それも人いきれの中だったから、私はよくかきごおりを買って食べた。私が好きだったのは、真っ赤で甘い、イチゴ味。

その年の夏祭りも、私は半分かきごおり食べたさに繰り出したようなものだった。和太鼓が遠くから聞こえてくるあの雰囲気の中で食べるかきごおりは格別だった。

いつも通り、イチゴ味のかきごおりを買った私は、スプーン状に切られたストローでかきごおりをすくいながら石畳の道を歩いていた。その時だ。「——きゃっ」

突然、肩に誰かがぶつかったのだ。振り向くと、そこには見たことのない男の子——それも瞳の色が青かった——が、少し気まずそうに立ち止まっていた。

私は、ぶつかった拍子に少しだけかきごおりを落としてしまっていたので、むすつとしながら男の子をにらみつけた。

すると、男の子の方も謝るでもなくつい、とそっぽを向いたので、私は思わず舌を出してあかんべをした。

すると、挑発に乗ったように、男の子も「べー」と舌を出し——それを見た私は、呆けたように言ったのだ。

「それじゃ、あかんべじゃなくて、アオンベだよ」

男の子も呆けたようになって、不思議そうに首を傾げた。

実は、男の子が出した舌の表面が、真っ青に染まっていたのだった。

私の言葉をきっかけに、私とその男の子は打ちとけあつて話を始めた。

男の子は、母親が日本人のハーフだということ。ここには旅行に来ているのだということ。それから、男の子はさっきまで青いかきごおりを食べていたということ。

男の子は最初の印象とは違って、とても陽気で楽しい子だった。時間が経つのも忘れて喋って、ふと気付くと男の子の両親がやってきていた。

「またね」

今度いつ会えるかなんて分からないのに、そんなことを言った男の子に、私は咄嗟にあかんべをした。

その後男の子が出した舌が何色だったのか——それは、思い出せない。その日、何故か私は泣きはらした。

成長して知ったのは、「あかんべ」の由来が『赤い目』だということ。

そういう意味では、確かに男の子のはアオンベで正解だった。

叶うならば、もう一度だけでいいから、あの「アオンベ」を目にしたいと、時折思う。

そうして私は、今年も夏祭りにやってきた。別に、何かを期待してとかそういうことは一切なく、ただ単純にかきごおりが食べたくなったのだ。

屋台のおじさんに頼むのは、もちろん、ブルーハワイ。

舌の気持ち

真つ暗な部屋に閉じ込められてこれまるで拷問

たまに窓が開いたと思ったら色んなことされて
すぐまた閉められるし：

色んなことって何かって？

そりやもうヒドイですよ

お湯ぶっかけられたりグチャグチャしたもの投
げつけられたり

でもまあこれも我慢我慢

主人を喜ばせるためですから！

「嘘」

果たして私は、意味のある人生を過ごせたのだろうか。

私はいわゆるニートである。仕事もしなければ大学へ通うわけでもない。社会のクズである。そんな私にも一っだけ自慢できることがある。それは、生まれてから一度も嘘をついたことがないことである。

まだ私が幼かった頃、母は私に、

「嘘をつくと閻魔さまに舌を抜かれますよ。」

と常々言い聞かせていた。私は幼心にも母の言う『閻魔さま』が怖かったので決して嘘をつかないようにしてきた。小学校に入学するころには『閻魔さま』など存在しないことはわかっていたが、その頃には嘘をつかないことが私にとっては当たり前のことになっていた。

だが、私の唯一の自慢もあの日までだった。あの日の朝、妹が体調不良で母に連れられて病院に行っていたのだが、昼過ぎに私のもとに病院に来るように母から電話があった。病院へ行くと、看護師の人に会議室のようなところへ案内された。そこには医者と父と母がいた。私が母に促されて椅子に座ると医者が重い口を開いた。

「大変、大変残念なのですが、娘さんは…ガンです。」

私は医者が何を言っているのか理解できなかった。

「手術は大変難しく、莫大な費用がかかるうえに、成功率は…十パーセントにも満たないでしょう。抗がん剤による治療での延命も可能ですが、それではせいぜい半年の命となります。」

母と父は泣いていた。私は啞然とするだけだった。

妹の病室は二階の隅の部屋だった。妹は父と母の重々しい様子を見るや私に尋ねてきた。

「お兄ちゃん。もしかして私って悪い病気なの？」

私は人生で初めての嘘をついた。

「大丈夫。手術をしなければならいんだけど、手術をすればすぐに良くなるよ。」

妹は困り顔で答えた。

「手術かあ。じゃあ今年は海には行けないね。」

それを聞いた母が泣き出しそうになったので、私は父と母を病室から連れ出した。そこで私は妹に生きて欲しいということ、お金は私も出すということ、可能性がわずかでも手術に賭けたいということを父と母に話した。母はずっと泣いていたが、父は大きく頷いた。

それから私は必死にアルバイトをしてお金を稼いだ。たとえ私がクズ人間でも妹のために何かしてやりたかった。妹にはいい人生を歩んでほしかった。

そして今日は、とうとう妹の手術の日である。私は深夜バイトを終え、帰り道をバイクで走っていた。ほとんど寝ていないせいか頭がクラクラしていたが、休むわけにはいかない。早く病院へ行かねば。その思いでいっぱいだった。さしかかる交差点、私は黄色信号でも迷わず突っ切った…

気がついたら暗闇にいた。意識ははっきりとしている。そうだ。私はトラックに轢かれたのだ。

「ここは死後の世界です。」

前方から笏（しゃく）と鏡を持ち、きらびやかな衣装に包まれた男が現れた。私はすぐに『閻魔さま』だとわかった。私の舌を抜きに来たのである。

閻魔さまは私に近づくとも手に持っていた鏡を差し出した。

「あなたのような人間は初めてですよ。一度も嘘をついたことのない人間なんて。」

鏡には妹の笑顔と父と母の喜ぶ姿が映っていた。よかった。手術は成功したようだった。

覚悟

敵陣の真つ只中、俺は両手を縛られている。幸いなことに口に詰め物をされてはいない。この隙に舌を噛み切り命を絶つのが最適手だろう。忍者として、そのくらいの覚悟は出来ている。見張りが一人しかついてない今が好機。一切の迷いを捨て、俺は自分の舌を――

「なあ」

不意に見張りが俺に話しかけて来た。驚いてしまい、舌を噛み切り損ねた。

「せつかくだから忠告してやるよ。お前今舌を噛み切ろうとしたろ？ 凶星だな。色々吐かされる前に自害しようって思惑だろうが、甘いぜ。いいか人間つてのは舌噛み切つたくらいで死ねないんだよ。舌が収縮して喉に詰まるとか出血多量で死ぬなんてことはまず起こりえない。とは言つても、噂では自殺に成功した例もあるらしいし、万に一つの可能性に賭けてみるっていうならそれもありかもな。お前にそれが出来るか？」

ついさつきまで舌を噛み切る決心をしていたはずなのに、今の俺は恐怖していた。どうせ殺される身、死ぬない可能性があつたとしてもやつてみるべきだ。そう思つてはみるものの、やはり怖い。死ぬことが出来ずに痛みにのたうち回り、その後に拷問にかけられ、心が折れて白状してしまう。そんな状況に陥ることを想像してしま

う。

「やばくなつたら死ねばいい、っていうのがお前にはあつたんだろう。そんなの覚悟じゃない。ただの甘えだ。覚悟つていうのは命懸けで生き抜くためのものなんだ。中途半端に死ぬためのものじゃない。それを覚えておくといい。仮にここから生還出来たとしたら、きつとお前のためになるぜ」

どうせ俺はここから生きては帰れない。そんなことを言われても何の意味もない。

しばらくすると、突然陣営が騒がしくなり、矢の雨が降り注いだ。敵軍の兵士が矢に貫かれて倒れていく音がする。どうやら、こちら側の攻撃が予定よりかなり早くなつたらしい。やがて、俺の目の前で見張り役も矢を受けた。喉に矢が刺さり、声を出すことなど出来ないようだ。

状況を飲み込んだ俺は、今が逃げ出す最大の契機であることに気付く。だが、駄目だ。足が震えている。俺みたいなのは自軍の矢を受けて死ぬのが関の山だろ、なんて考えすら頭をよぎる。諦めの沼に足が引き摺りこまれる。

そんなことを思っていたとき、見張りの奴が俺の肩を渾身の力で掴み、俺の目を血走つた眼で睨みつけた。「行け」と口を動かしたように思えた。時が止まつたような感覚を覚えた。

それを受けて強くうなずくと、俺は走り出した。ついに、覚悟を決めた。

月と日本酒

眠れない夜

今日は あのバーにいかない

ゆっくりと自転車を走らせる

セミの声が微かに聞こえる

生暖かい風が顔に当たって

ゆるやかな気持ちになる

月が満月というにはまだ物足りない

やっと見えた 明るい光

いらっしやいませ

つかれた顔の店員

やっぱり こういう夜は安酒に限るな

ただれた心を癒してくれるのは

ママでもなく、高級なウイスキーでもない

この安くて苦い日本酒

月を見ながら 舐める

苦味が舌に広がる

やっぱり 月はすこし欠けてるくらいがいいな

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	風船ガムもこわくない	0 pt	10 位	2 sp
		きれいなヨコヨミフレーズが入った表紙で、今週のスタートです。 けなげさがしっかり形になっていますね。「くちの中のポセイドン」という表現が特にお気に入りでした。 特別賞：逆あいうえおガンバったで賞（ガンバったねー）テクニカル賞（風船ガムも怖くない） イチオシフレーズ：「もしも膨らんだアレが破裂して」		
A02	断舌道場	0 pt	10 位	1 sp
		なんだろ、この謎の道場と分け入っていくと、ラストで大寫しになる口内炎がブキミです。 ちょっとSF的でもあるシュールな味わいでした。もしかして、ダイエットへの風刺も含まれていたりしたでしょうか。 特別賞：タイトル詐欺で賞（舌が切られる展開を期待してたのに……）		
A03	舌が持つ力から考察する 食事の音楽性	8 pt	4 位	0 sp
		料理と音楽という、遠いように見える二つをていねいに結びつけて、しっかり説得力を獲得しています。 おとなのコラムの風格でした。 「機能的」vs「文化的」。こんなふうにキーワードをセットにして提示すると、ロジカルにすっきり仕上がります。正統派をみざす諸氏は基本テクを学ぶべし。		
A04	無題（【牛タン】とかけまして）	13 pt	3 位	3 sp
		ウケようがコケようが構うもんか！ ずとんとシンプルな潔さが持ち味でした。 その潔さが読者の琴線にピンポイント、みごとヒットしましたね。ブロンズ・メダルにイチオシフレーズ大賞も合わせゲットです。おめでとう!! 特別賞：気付かなかったで賞（大半が気付いてなかった）ねづっち賞（整っていたから）謎かけ賞（うまい!） イチオシフレーズ：「したがうまい。」× 5		
A05	おまもり	2 pt	9 位	1 sp
		ひからびた舌を連ねたおまもり。グロテスクさで迫りつつ、人という弱い存在が何をよすがに生きてゆくのかという哲学的な洞察へいざなっていただきました。 特別賞：R-15指定で賞（グロいから） イチオシフレーズ：「恋人のストッキング」「あるいは。」		
A06	無題（純粹に笑うことを忘れ）	3 pt	8 位	0 sp
		失うことでおとなになってゆく。「舌を出して」の一語が、とがって光ってます。		

		夕焼け空に静かなナレーションで聞きたいフレーズでした。
A07	膚	23 pt1 位0 sp もやもやのかたち。比喩的な表現で、日常にありがちの感覚をうまく再現していただきました。 ありますよね。いらだちや怒りのように爆発せず、じくじくぐずぐず引かかる厄介ごと。それこそが人生そのもののありよう。 ストーリーの感動もネタの起爆力も使わずに、これだけじっくり読ませてしまう。一見地味なこの作品をゴールド・メダルに選んだフロアもおみごとでした。 おめでとう!! イチオシフレーズ：「それに気づいて日常は色あせてしまった」
A08	無題（千口ルチョコ）	6 pt7 位0 sp うん、これはユニーク着眼。「チ口」→「舌」ですか。なあるほど。 あんなちっちゃなモノを舐める彼女。それはきっと男の視線を意識して誘っている艶っぽいしさ。 ダメですよ、お兄さん、そんな初級テクでダメされちゃ。夏場は特にご用心。 イチオシフレーズ：「チ口ルチョコ」
A09	二枚舌	21 pt2 位1 sp みんなじつは二枚舌という寓話をあざやかに造型していただきました。 再び引きこもってしまった暗い結末。その先に僕の未来はあるのか。先が気になってしまうほど深い印象を刻みます。 二週連続シルバー・メダルは、すばらしい戦績だけれど、作者さんはさらに上を目指しているようです。がんばれー。何はともあれ、おめでとう！ 特別賞：非国民賞（班員が誰も観戦していなかったから。作者のことではありません。面白かったです。） イチオシフレーズ：「クラスメイト全員の口の中に二枚の舌があった。」
A10	無題（本当は）	0 pt10 位0 sp ポジティブ気分が伝わってきます。 ただ状況が良く見えません。舌からその持ち主へ語りかけている応援メッセージ？ それとも逆でしょうか。 どちらとも取れそうですが。 作者さんのご登場をお待ちします。
A11	舌を切られなかった雀の話	7 pt5 位0 sp 舌切り雀+桃太郎+鶴の恩返し+α。おとぎ話ミックスをころころ楽しく転がして。 さいごは、あざとい雀の残念な結末へと収束して、ちゃんと勧善懲悪のお約束に収めたところもグッジョブでした。まさに、めでたしめでたし！ イチオシフレーズ：「どうだい、あの様は」
		7 pt5 位7 sp 話し声。「言」を取ったら、ただの「乱声」。 深い意味を秘めつつ、……（折れ線だったんです！） だけでさっくり見せて。クラフツマンシップあふれる

A12	話し声	今週の裏表紙でした。 作者さんの意図が読めた班もそうでない班も興味しんしん、話題をさらって最多特別賞です。おめでとう!! 特別賞：意味がわからないで賞（気になる。印象に残る）ズレたで賞（折れ線がずれてたから）本田賞（無回転）気付かなかったで賞（半角の「し」に意味が、、、？）折り曲げま賞（点線で折ると……）何なんで賞（謎が多い！）ある意味12で、賞（話題をさらった。） イチオシフレーズ：「話し声」×3
-----	-----	---

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数 まじょコメント	順位	特別賞
B01	無題（甘味塩味）	1 pt 味覚戦隊5レンジャー！な気分の表紙です。 まったり甘味、すっきり酸味、似合いそうなフォントをコレクションしていただきました。色が付くともっと楽しい企画かも。 特別賞：辛味賞（味の要素として一般的な辛みではなく、うま味を採用した点） イチオシフレーズ：「おなかがすきました。」×4	8 位	1 sp
B02	コトノハ	0 pt 堂々の正統派登場。 さりげないつかみから入って、言霊論を全面展開。呪文という現象にフォーカスすることで、説得的な論理展開になっています。序盤の「口調」の話だけが論理にうまく組み入れられていない感。そのあたり、きれいにするともっとパワフルになりそうです。 特別賞：Nice boat賞（タイトルより「中に誰もいませんよ？」）	9 位	1 sp
B03	動物たちのお話	0 pt えーそこ「犬」でしょ、とツッコミながらも動物会話の楽しさに入っていくと、二枚舌牛へと世知辛く収束。牛の振る舞いと犬猫の作戦がぴたり一致してウィットの効いた仕上がり。グッジョブでした。 しかし、牛はふつう養殖しないでしょ。海牛か？ 特別賞：「なあ、犬さんよお」賞（猫が自分で「なあ、猫さんよお」と言っているから）ミスったで賞（猫「なあ、猫さんよお」） イチオシフレーズ：猫「なあ、猫さんよお」	9 位	2 sp
B04	とある4時間目の早弁（ランチタイム）	0 pt 授業内容とオチをリンクさせるという仕掛けで、なあるほどと納得しつつ、ちゃんと豆知識ゲットにもなるという、工夫されたおもしろいつくりでした。 しつもん。松橋君は佐藤君の心中トークをどうやって察知したのでしょうか？ 特別賞：畜賞（特別賞名が作りやすかった。） どや賞（松橋君のどや顔）	9 位	2 sp
B05	ひとひらの恋	10 pt 夏祭りの夜だから。人は幻を見てしまう。 林檎飴に濡れた真っ赤な舌のつややかさ。 くっきり切り取ってあざやかです。 ロリータを枕にたんたんと抑えた筆致で語ることで、底知れない愛情の深淵へとすーっと引き込まれます。人生、至るところ林檎飴あり。	5 位	2 sp

		特別賞：ロリコン乙で賞（作者ロリコンで賞） 上位に入って欲しいで賞（現実味がある！！）
B06	日記	14 pt2 位0 sp 「ちょっと舌打ちしたくなりました」のリフレインが、いいリズムで歌詞のように効いて、日常感あふれた親しみやすい作りです。 そしてラストへ。終わりよければすべて良し。経済学ではピークエンドの法則と申します。明日もいいことありますように。 ぎっしりの力作揃いの今週、さわやかな風を吹かせてシルバー・メダルでした。おめでとう!! イチオシフレーズ：「おまえってはんぺんに似てるよな」「ちょっと舌打ちしたくなりました」
B07	アオンベ	13 pt3 位1 sp 遠き夏の日の一瞬のめぐりあい。イチゴからブルーハワイへと好みが変わった、そのわけは。 ストーリーをていねいに組み立てつつ、アオンベというユニークな造語で印象づけて、しっとり浸れる世界を仕上げていただきました。ストーリーテラーとしては手ごたえのブロンズ・メダルですね、おめでとう！ 特別賞：ブルーハワイ賞（甘酸っぱいですね。） イチオシフレーズ：「アオンベ」
B08	舌の気持ち	0 pt9 位1 sp がんばってくれてる舌の気持ち。すっかりなりきって、ああそんなふうに見えるのかとミニ・トリップ体験。さりげないづくりが好印象です。 特別賞：大変で賞（大変そうだから。）
B09	嘘	33 pt1 位0 sp 感動巨編です。病気の妹さんが出てきてしまっはニートも勝てませんね。 人生初めての嘘をひっくり返して見せたお兄ちゃんの愛！ 閻魔さまの前で、終わって振り返る人生の意味に至るまで、緻密にパワフルにつくりあげていただきました。ラストの鏡がいい光景です。 すでいすでい。圧勝でしたね！ おめでとうゴールド・メダル!!!
B10	僕と彼女ととろろ芋	11 pt4 位3 sp rubかな、たぶん。わははなオチでした。 テキサスガールをとろろ芋で口説いちゃう。発想の楽しさとコミカルな展開で、もはやエンターテナーの域に達しています。 ベスト3は惜しくも逃したけれど、最多特別賞&イチオシフレーズ大賞のダブル受賞です、おめでとう!! 特別賞：最多R賞（Rが文中に36個あったため）面白いで賞（他の作品とちがって軽い感じがよかった。） 浮気で賞（浮気はいけません。） イチオシフレーズ：「あい RRRRRRRRRRRR らぶ ゆう！！」×5 「とろろRRRRいも」
B11	覚悟	5 pt6 位0 sp 中途半端に死ぬな。極限状況を設定することでメッセージが強烈に伝わってきます。 設定の巧みさとともに「諦めの沼に足が引き摺こまれる」なんていう、こまやかに工夫された心情表現が、とても印象的でした。 イチオシフレーズ：「覚悟っていうのは命懸けで生き抜

		くためのものなんだ。」
		3 pt7 位2 sp
B12	月と日本酒	ラストはおとなの世界へどうぞ。 心がひりひりする夜は、高級バーじゃダメなのさ。月を見ながら、のんびり安酒の屋台がいい。人生を背負った男の背中が淡く浮き上がります。 「月はすこし欠けてるくらいがいい」——道長ぼっちゃんさようなら。酸いも甘いも噛み分けたおとなの哲学でした。 特別賞：大人賞（大人だから）年齢詐（称）賞（何歳ですか？）